

<p>3月22日 (日)</p> <p>歴代誌上 2章</p>	<p>「イスラエルの子らは次のとおりである」(1節)。イスラエルの物語の中で、神と人が歩んだ歴史が描かれる。イエス・キリストにつながる歴史。この系図に名前が刻まれている人、そのそばで生きた人たちの人生にも神は寄り添い歩み、イエス・キリストへとつながる。私たちの歴史の源にあるものは何かを心に留めて主の神殿に共に集い、礼拝をささげます。</p>
<p>23日 (月)</p> <p>歴代誌上 3章</p>	<p>「捕虜となったエコンヤの子は、息子シェアルティエルをはじめ、マルキラム、ペダヤ、シェンアツアル、エカムヤ、ホシャマ、ネダブヤ」(17-18節)。主に従い歩んだダビデ、ヨシヤの後、その子孫は捕虜となる。捕囚の苦しい時代、主の義さを求め続けた先達たちの信仰に励まされながら、主の民は歩んだのではないだろうか。私たちも励まし合いつつ歩みたい。</p>
<p>24日 (火)</p> <p>歴代誌上 4章</p>	<p>「ヤベツがイスラエルの神に・・・祈ると、神はこの求めを聞き入れられた」(10節)。「苦しみ」「痛み」「傷」という名前と呼ばれたヤベツ。苦しみと痛みの中を生きていたであろうヤベツの祈りを神は聞き入れられた。苦しみの中に主の恵みが注がれる。ヤベツは苦しみの中にも主の御手が共にあることを祈り求めた。すべての命は主の御手の中にあることを覚えて</p>
<p>25日 (水)</p> <p>歴代誌上 5章</p>	<p>「彼(アッシリアの王プル)はルベンの部族、ガドの部族、マナセの半部族を捕囚として・・・引いて行った。彼らは今日もなおそこにいる」(26節)。イスラエルの民、ルベン・ガド・マナセの三部族は歴代誌が書かれた時代には消息が不明になっていた。「彼らは今日もなおそこにいる」という言葉は、いつか主の民が一つに集められることへの期待が語られている。</p>

<p>26日 (木)</p> <p>歴代誌上 6章</p>	<p>「神の箱が安置されたとき以来、ダビデによって主の神殿で詠唱の任務につけられた者は次のとおりである」(16節)。 歴代誌の中でレビの系譜は丁寧に伝えられる。イスラエルの神に真の礼拝をささげたい思いが伝わってくる。祭司とレビ人の働きが組み合わされて、音に合わせた賛美が礼拝でささげられる。私たちが主に喜ばれる賛美をささげたい。</p>
<p>27日 (金)</p> <p>歴代誌上 7章</p>	<p>「ナフタリの子は、ヤフツィエル、グニ、イェツェル、シャルム。彼らはビルハの子である」(13節)。他の部族に比べてナフタリ族の記述は1節のみ。記述されていないゼブルンとダン。 「先にゼブルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが…異邦人のガリラヤは、栄光を受ける」(イザヤ8:23)。失われた2部族からイエス・キリストの希望が語られている</p>
<p>28日 (土)</p> <p>歴代誌上 8章</p>	<p>「彼らは、系図に記された家系の長たちである。この家系の長たちはエルサレムに住んだ」(28節)。捕囚後にエルサレムに戻り、エルサレム神殿再建のために仕えた人たちが、アブラハム、アダムから受け継ぐ、主の民として、人としての尊厳を取り戻すかのように、これまでの系図には、女性たちの名前も含めて多くの名前が記される。</p>
<p>29日 (日)</p> <p>歴代誌上 9章</p>	<p>「コラの家の方が、幕屋の入り口を守る者としての職務に就いた。彼らの先祖も主の宿営の入り口を守っていた」(19節)。捕囚後、エルサレムに帰還したレビ人で「門衛」を職務とする人たちがいた。800年以上受け継がれた職務が捕囚期間中も継承され続けたことに驚かされる。目に見える神殿を失っても、彼らの主に対する信仰が失われることはなかった</p>